

オンライン講演「ファン・ゴッホの星空の天文学的鑑賞」要旨

石坂 千春*

概要

2021年度に実施されたオンラインでの講演会で、ファン・ゴッホの絵画3作品「ローヌ川の星月夜」「星月夜」「夜のプロヴァンスの田舎道(糸杉と星の道)」について、天文学的視点から考察した。その講演要旨をまとめる。

1. はじめに

ファン・ゴッホ(1853年3月30日-1890年7月29日)は星空や天体をモチーフにした作品を残している。

これまでに「ローヌ川の星月夜」(1888年、オルセー美術館蔵)[1]、「星月夜」(1889年、ニューヨーク近代美術館蔵)[2]について報告をおこなったところではあるが、今回、「糸杉と星の道」(1890年、クレラー・ミュラー美術館蔵)についても天文学的な考察を加え、オンライン講演会で紹介したので、報告する。

当該テーマで講演したのは次の3件である。

- (1)9月18日 大阪市立科学館連続オンライン講座
 - (2)9月18日 友の会例会
 - (3)1月29日 Osaka Museums学芸員Talk&Think
- 次章からは、紹介した3作品について、講演の骨子を述べる。

2. 「ローヌ川の星月夜」

2-1. 作品概略

「ローヌ川の星月夜」(図1)は、1888年9月、南仏アルルで描かれた作品である。

ローヌ河畔の東岸セゴノー通りから、南西方向を眺め、曲行するローヌ川とアルルの夜景の上に、ひしやく型に並ぶ七つの星を配している。

ゴッホは1888年2月、憧れの日本を求めてアルルに移り住んだ。アルルの北緯は43.6度、北海道の札幌とほぼ同じであるが、パリからすれば“南国”であり、ゴッホはそこに「日本を感じて」いた。

日本を、陽の光にあふれ、芸術家たちが共同生活を送りながら創作活動に励むユートピアと考えていたゴ

ッホは、アルルに画家仲間を呼び集めて共同体を形成し、理想郷としての「日本」を築きたいという夢を見ていた。「ローヌ川の星月夜」は、まさに、その理想に向かって進もうとしている喜びと創作意欲にあふれたところに描かれた作品である。

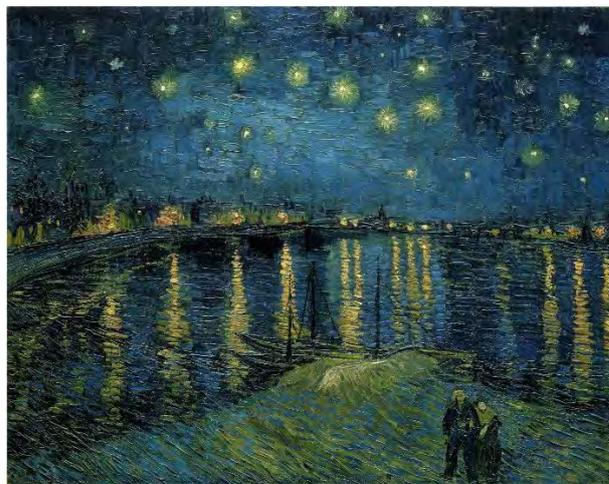


図1. 「ローヌ川の星月夜」

(1888年、オルセー美術館蔵)

ローヌ川は右手前から一旦左側へ曲がった後、右奥へと流れている。画面の上半分を占める星空に「北斗七星」が描かれている。

2-2. 星図との比較

ゴッホはこの絵について、1888年9月28日付の弟テオへの手紙で、こう書いている。

「アクアマリンの夜空に、おおぐま座(北斗七星)は緑とバラ色に輝き、その控えめな青白い光は、殺伐としたガス灯の黄金色と対照をなしている」

*ishizaka@sci-museum.jp

しかしながら、実際の光景としては、この構図で北斗七星が見えることはありえない。なぜなら、地上の風景は南西の方角を描いており、北斗七星は文字通り北の空にあるからだ。

見えないはずの北の空にある北斗七星を中央に配置したゴッホの意図は何であろうか。

報告者は[1]において、星の明るさ、色、配置等から、ゴッホが描いたのは北斗七星ではなく、「秋の大びしゃく」なのではないか、と提唱した。「秋の大びしゃく」はペガサス座～アンドロメダ座～ペルセウス座にわたる星の並びで、当該作品が制作された9月下旬の夜半には頭上高く広がっている。

残念ながら現地調査の結果、「秋の大びしゃく」は、この絵の画角に対して大きすぎるということが判明した[3](図2)。

一方、北斗七星は、方角は異なるが、見かけの大きさは、この絵で描かれているものと一致する。

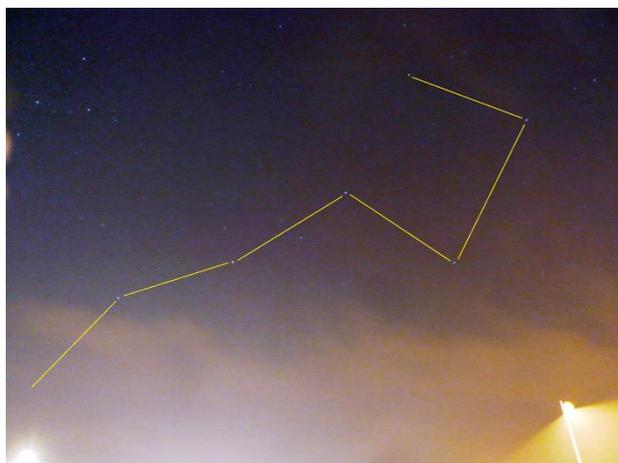


図2. 絵と同じ画角で撮影した秋の大びしゃく
(2012年9月28日、アルルにて撮影)
秋の大びしゃくは北斗七星と形はよく似ているが、見かけの大きさは3倍ほどである。



図3. 9月下旬22時ごろの北斗七星
(ステラナビゲータ[4]により作成)
北斗七星が地平線にほぼ平行になる時、その方角は北北西である。

なお、北斗七星は日周運動によって、天の北極を反時計回りに周回する。9月下旬、この作品のようにほぼ水平に北斗七星が横たわるのは22時ごろである。

この時、北斗七星は北北西にある(図3)。

2-3. 考察

描いたのは北斗七星だとしても、おそらく「秋の大びしゃく」を見たことが、ゴッホに「ローヌ川の星月夜」を描かせたのだろうと報告者は考えている。

ゴッホは夜、外に出て星を描いていた。星空(自然)の中に神の声を聴くことができると考えていたからだ。

1888年9月下旬、午後10時ごろ、ゴッホはローヌ川東岸から北天を眺め、そこに北斗七星を見た。北斗七星が横たわっているのは北北西。アルルからは、ちょうどパリの方向に当たる。

ゴッホがパリで交流を持ち、アルルに呼び寄せたいと思っていた画家仲間は、エミール・ベルナール、ピーター・ラッセル、トゥールーズ・ロートレック、ルイ・アングタン、ポール・シニャック、A.H.コーニング、そしてポール・ゴーガンの7人。

ゴッホはこの7人がアルルに来る日を、今か今かと待ち焦がれていた。

ふと上空を眺めたゴッホは驚愕したはずだ。そこに、北斗七星と同じ形だが、はるかに大きな7つの星の並び「秋の大びしゃく」が見えたからだ。

ゴッホはこれを神の啓示と捉えたことだろう。

パリにいる7人(パリの方角で輝く北斗七星)が、星空では、すでにアルルに来ている(上空に見えた「秋の大びしゃく」)! これは神がゴッホの夢、芸術家たちのユートピアを祝福してくれているのではないか!

だからゴッホはアルルの街並みの上に北斗七星を描いたのではなかろうか。

しかし、なぜ南西方向を描いたのだろう?

アルルは世界遺産にもなっている観光名所である。アルルらしき景色、描き映えのする風景は他にも多数ある。それこそ、ゴッホが画家仲間との共同生活のために用意した「黄色い家」の上に北斗七星を描いてもよかつたはずだ。

ゴッホがローヌ河畔から南西を描いた理由、それもゴッホの日本への憧れを反映している、と報告者は考えている。

ゴッホは浮世絵を収集し、日本への憧れを膨らませていた。特に影響を受けたのは安藤広重の作品である。その安藤広重の「江戸名所百景」の中に、「小奈木川五本松」という作品がある。

画面の上半分を占めるのは空である。そして右手前から右奥へと川(堀)が曲行し、船が一艘浮かんでいる。川を縦に横切るように松の支柱が描かれている。

まさに「ローヌ川の星月夜」で描かれている地上景と酷似しているように報告者には思える。

だからこそゴッホは、この画角を選んだにちがいない。セゴノー通りから南西を眺めたアルルの景色は、ゴッホにとっては絵に見た日本そのものだったのだ。

ゴッホは憧れの日本を求めてアルルに来た。そしてアルルに日本と同じような芸術家たちのユートピアを築こうとした。

前出の1888年9月28日付のテオへの手紙には、続きがある。

「とにかく、どうしても、ぼくには宗教とでも言うべきものが必要だ・・・だからぼくは夜、外に出て星を描く。そして生き生きとした友の姿を描いたこんな絵を、いつも夢見ている。」(傍線は報告者)

「日本的な風景」の上に、呼び寄せる友(画家仲間)たちの象徴として北斗七星を描いた「ローヌ川の星月夜」で、ゴッホは自身の夢を実現していたにちがいない。

3. 「星月夜」



図4. 「星月夜」

(1889年、ニューヨーク近代美術館蔵)

天に届くような糸杉と、高い尖塔をもつ教会と田園風景、そして細い月と星が描かれている。

3-1. 作品概略

アルルでの夢破れ、心を病んだゴッホは1889年5月、サンレミ・ド・プロヴァンスの療養所に自ら入所する。その療養所で同年6月に描いたのが当作品である。

1889年6月17日付のテオへの手紙には、こう書かれている。

「今朝、日の出のだいぶ前に、窓から田園風景を見た。明けの明星(金星)だけが、とても大きく見えた。」

この記述から、画面中段左側、糸杉の右側に描かれる星は金星であると推測されている。

風景については、さまざまなモチーフを組み合わせた架空のものである。療養所の窓から、当該作品のような景色が見えることはない[3]。

また、この絵について記述した1889年6月17日の朝には、月はもっと丸みをおびており、金星からはもっと右(南)側に離れていたはずである。

なお、この絵の構図が安藤広重の「江戸名所百景」のうち「王子装束急の木大晦日の狐火」とよく似ていると思うのは報告者だけであろうか。

3-2. 星図との比較

描かれている星については諸説ある。

C.ホイットニーは未明ではなく6月中旬の21時ごろの星空としている[4]。そして画面中央に渦巻く模様は天の川を現していると推測している。

だが、夏至に近い6月中旬、北緯44度のサンレミ・ド・プロヴァンスでは、21時といえどもまだ空は明るく、天の川は決して見えないはずである。夜明けの空を見た、というゴッホの手紙の記述とも合わない。

一方、A. ボイムは、手紙より1週間ほど後の、1889年6月下旬の未明、東空のおひつじ座を描いたと主張する[5]。この場合、たしかに月の形は細くなり、金星に近づいている。だが、おひつじ座を描いたのだとすると、おひつじ座が大きすぎるし、星の数が多すぎる。

報告者は、ボイム説と同様、1889年6月下旬の未明の東空を描いたとし、おひつじ座だけではなく、うお座～おひつじ座を描いていると考えた[2](図5)。



図5. 1889年6月23日ごろの東天
(ステラナビゲータにより作成)

「星月夜」に描かれている星の位置となるべく対応するよう、水平を20度ほど傾けている。図中の×印は2000年前の春分点の位置である。

月の左に並ぶ星がうお座の α 星と \circ 星、画面左上におひつじ座の α 星、 β 星、 γ 星が左右反転した「へ」の字をに対応しているように思える。金星の位置も、よく合っている。ただし、水平が20度ほど反時計方向に傾いている。

3-3. 考察

報告者は、今回の講演に当たって、新たな解釈を加えた。この作品はゴッホがイエス・キリストの誕生(キリストの時代の始まり)を表現しているのではないかと。

この絵には対になる作品が存在する。

「白い雲と山とオリーブ」(1889年、ニューヨーク近代美術館蔵)である。この絵は、イエス・キリストの最期を描いているとされている。なぜなら、「山」と「オリーブ」のモチーフは、イエスが磔刑の前、弟子たちとオリーブ山で行った“ゲッセマネの祈り”を象徴するからだ。

ならば対になる「星月夜」はイエス・キリストの誕生を象徴しているのではなからうか。

実は、うお座はイエス・キリストの象徴とされる。なぜなら、イエスが誕生したころ、暦の基準である春分点が、歳差運動のため、それまでのおひつじ座領域から、うお座へ移動しているからだ(図5の×印が2000年前の春分点の位置)。

絵で言えば、月の左の上の星(うお座 \circ 星)のすぐ左であり、田園風景に描かれた、そして実際には存在しない教会の高い尖塔が、まさに指し示している位置である。

ゴッホは見たものしか描けない画家だった。

1889年、ゴーガンやベルナルの作品に触発されて、ゴッホもキリストを描くことを試みたが、どうしても描くことができなかった。ゴッホは“本物のイエス・キリスト”を見たことがなかったからだ。

「星月夜」は、自然のモチーフを用いてイエス・キリストを象徴させる、ゴッホにとっては渾身の宗教画だったのである。

4. 「糸杉と星の道」

4-1. 作品概略

この作品はプロヴァンス滞在の最後期(1890年4月頃)に描かれたもので「夜のプロヴァンスの田舎道」「糸杉と星の見える道」等、さまざまな呼び名がある。

中央にオベリスクのように天を衝く糸杉を描き、その右側に細い月、左側に明るい星と、控えめな星を1つずつ配置している。

右奥から手前に道と旅人が描かれ、その構図は安藤広重の「木曾街道六十九次」のうちの「中津川」を思わせる。

ゴッホは1890年6月17日付のゴーガンへの手紙にこ

う書いている。

「私はここで糸杉と星を描いた。

ここでの最後の試みだ。

夜空に浮かぶ細い月が

地球の影からわずかに輝きを見せ、

海色の空に輝くピンクと緑の星が

明るく目立っている。

下には青く低いアルピーユの山脈、古い宿、

(中略)、

道の上には黄色い荷馬車と2人連れ…」



図6. 「糸杉と星の道」

(1890年、クレラー・ミュラー美術館蔵)

オベリスクのような様相の糸杉を挟んで、細い月と明るい星が描かれている。右下隅に、歩く人と馬車が手前へと進む。

4-2. 星図との比較

A.ボイム[6]は、1890年4月20日夕方の月と金星と水星の接近に触発されて、ゴッホがこの絵を描いた、という可能性について言及しているが、実際の月、金星、水星の位置は、この絵とは左右反対であった。

また、細い月の向きも不自然である。

光っている側は太陽を向いているはずなので、通常の夕方の三日月であれば、右下が明るいはずである。

この絵のように三日月の右上が光っているなら、太陽は#月の右上#にあることになる。

そうだとすれば、この空は太陽が沈んだ後の「夕方」ではなく、日の出後の「朝」に当たるはずであり、実際

の空では当然、細い月も星も見えなくなっている。

ところで、前述のゴーガンへの手紙に、気になる記述がある。

「夜空に浮かぶ細い月が
地球の影からわずかに輝きを見せ・・・」

(傍線は報告者)

通常の月の満ち欠けは地球の影とは関係なく、月の公転によって変わる太陽と地球と月の位置関係によって、月の夜の部分が地球からどのくらいの割合で見えているか、である。

天文学に一方ならぬ興味を抱いていたゴッホは、もちろんそのことを知っていただろうから、三日月を「地球の影からわずかに輝きを見せ」た、などと表現するはずがない。

では、なぜゴッホは「地球の影」などと手紙に書いたのであろうか。

地球の影に月が入るのは「月食」の時なので、この絵も本当は月食を描いているのだろうか？

天文シミュレーションソフトで調べてみると、食分が絵の月に最も似ている月食が起きたのは1888年1月28日の真夜中であった。しかし、この時、月は頭の真上近くであり、かつ、月の近くに明るい星はなかった。したがって、やはり絵の構図とは合わない。

月の形(位相)や方角に拘らなければ、1890年3月12日、南東の空で満月過ぎの月(絵の中の月の欠け方を明暗反転させた感じの月)と火星、さそり座の一等星アンタレスが、絵と同じ配置で並んでいた状況が、最も絵の構図に近いようである(図7)。



図7. 1890年3月12日未明の南南東
(ステラナビゲータにより作成)

満月過ぎの、まだ丸みをおびた月が、火星、一等星アンタレスと並んでいる。この時、火星は0等級、アンタレスは1等で、火星の方が明るかった。

しかし、わざわざ月の形を明暗反転させ、通常の三日月とは異なり、右上を光らせたのはなぜであろう？

4-3. 考察

この作品は、3か月後に亡くなるゴッホが自らの死を予感して描いたと解釈されている。中央に描かれた糸杉が、この地方では墓地によく植えられているように、死を象徴するからだ。

そうだとすると、ゴッホにとって「死」は悲観すべき事象ではなかったはずだ。

1888年7月10日付のテオへの手紙に、こんな一節がある。

「僕には星々が地図上の町の印に見える。

…(中略)…

列車に乗って遠くの町に行けるように、

死ねば星まで行けるだろう。

…(中略)…

長く生きるか、短く生きるかは、

星までの旅の手段の違いに過ぎないのだ。」

ゴッホにとって死は、星の世界への旅であった。

そして星の世界は、第2章2節で述べたように、ゴッホにとっては、神の世界であった。

星の世界は、太陽も地球も月も惑星も星座の星たちも、すべての星が万有引力によって繋がり、どれ一つとして例外はない。

ゴッホは当時、身を切られるような孤独感に苛まれていた。ともにユートピアを築こうと願っていた画家仲間たちはアルルに来ず、最愛の弟テオは結婚して子が生まれ、自らの家庭を第一に考えるようになった。

すでにゴッホはその独特な作品が世間に知られるようになっていたが、自然に潜む神の声を絵によって伝える伝道師を自認していたゴッホは、現世での名声を拒否し、キリストの受難を自らに課していた。苦しい生活をするからこそ、神の声を伝える資格があるのだと。

そのような視点から「糸杉と星の道」を見てみよう。

画面右下に描かれた道は人生の旅路を象徴し、「旅の手段」が異なる歩行者と馬車を配置している。道に接する中央の糸杉は「死」の象徴というよりは、魂が炎のように天に昇っていくことを表しているように思える。

本来は丸みをおびていた月を、右上を明るくした三日月にすることで、この絵の画角の外に太陽があることを暗示し、月の暗い部分を「地球の影」と表現することで、(もちろんゴッホが見たはずのない)地球をも絵の上に存在させた。

この絵では、万有引力によって繋がる太陽、地球、月、惑星、星たちを全て描き、神の世界である宇宙へと、人生の旅路を終えた生命の炎が昇っていく、そんな構図が描かれているのだ。

ゴッホはこの絵で、死によって、孤独を感じることはない、真のユートピアである星の世界、神の傍に向かう人生の旅路を表現していたのではないだろうか…。

5. おわりに

今回紹介した「ローヌ川の星月夜」「星月夜」「糸杉と星の道」の考察は、報告者の勝手な解釈である。

美術の専門家でもなく、もちろん、ファン・ゴッホから直接、聴いた話でもない。

ただ、美術品の解釈や感想は、鑑賞者の自由ということで、ご容赦願いたい。

絵画を天文学的な視点から鑑賞する、という新たな試みを読者・聴講者にも楽しんでいただければ幸いです。

参考文献

- [1] 石坂千春, 天文教育2012年1月号, p83 (2012)
- [2] 石坂千春, 天文教育2013年1月号, p38 (2013)
- [3] 石坂千春, 大阪市立科学館研究報告26号, p. 19 (2016)
- [4] アストロアーツ社「ステラナビゲータ11」
- [5] Charles A. Whitney, Art History vol.9 No.3, p.351(1986)
- [6] Albert Boime, Arts Magazine vol. 59, No. 4, p. 86 (1984)
- [7] Albert Boime, Revelation of Modernism, p. 2 (2008)